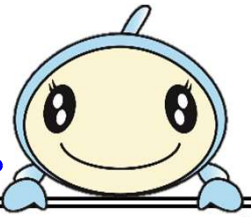
回　覧

第7号
R8.10月



【発行・編集】
滑川町教育委員会
教育長　上野　修
TEL0493-56-6907

町の子供は町で育てる

「3つの合言葉」元気・学び・会話

滑川町教育委員会だより

「学んでよかった町へ　-チーム滑川での教育-」

自分の言葉で思いを伝える

四十五ねんのあいだわがままお
ゆてすミませんでした
みんなにだいじにしてもらて
きのどくになりました
じぶんのあしがすこしもいご
かないのでよくよくやに
なりましたゆるして下さい
おはかのあおきがやだ
大きくなればはたけの
コサ（木障・木の陰）になり
あたまにかぶサて
うるさくてヤたからきてくれ
一人できて
一人でかいる
しでのたび
ハナのじよどに
まいる
うれしさ
ミナサンあとわ
よロしくたのみます
二月二日二ジ

朝倉喬司『老人の美しい死について』作品社

2学期が始まって一ヶ月が経ちました。例年は厳しい残暑の続くこの時期ですが、今年は晴れの日が数えるほどしかなく、秋が急ぎ足でやってきました。秋といえば、食欲の秋、スポーツの秋、芸術の秋、そして読書の秋です。今回は読書の秋に因んで言葉を学ぶこと、なかんずく文字を学ぶことの意味について考えてみたいと思います。

冒頭紹介したのは、木村センさんの遺書です。間違いだらけの文章ですが、とても心を打たれます。センさんは、明治24年に群馬県吾妻郡の農家に生まれ、生涯一人の無名な農民として働き続けた人です。この頃の農民は貧しくて子供の頃から農家の働き手としての役割を求められ、学校に行けない人がとても多かったのです。特に女性はそうでした。センさんもやはり学校に行くことができず、文字の読み書きができませんでした。読み書きができないまま、毎日一所懸命に生計を立て続けたのです。やがてセンさんは老い病んでいきます。センさんは亡くなる前にどうしても家族に言葉を遺したいと思うようになりました。一念発起し、小学校入学を控えたお孫さんの相手をしながら文字の手習いを始めました。「あ」「い」などと声を出しながら、お孫さんと一緒に絵本を読み文字を学んだのです。センさんには「自分の思いを家族に遺す」というはっきりしたとても強い目的がありました。何としても書きたい、書き遺さなければならないという思いがあったのです。もう一度、センさんの遺書を読んでみてください。できあがった文章は間違いだらけです。でもこれほど美しくこれほど思いが伝わってくる文章を、私は読んだことがありません。センさんは64歳にして目覚め、文字を学び見事に目的を果たしたのです。

「64歳にして」といえば、もう一人紹介したい人がいます。西畑　保さんです。西畑さんは昭和11年、和歌山県の山奥にある炭焼き小屋に生まれました。母親とは幼い頃に死別しました。小学校までは12km。歩いて3時間もかかりましたが、友達をつくりたいとがんばって通いました。2年生になると貧しさを理由に盗みを疑われ、いじめを受けるようになります。2年生の途中で学校に行かなくなり、文字の読み書きを覚えないまま育ちました。12歳になると働き始めます。パン屋を皮切りにあちこちの飲食店で働きましたが、出前の注文の電話を受けても注文内容や名前を書き取ることができません。買い出しのメモも読めません。そうしたことの積み重ねで差別的な扱いを受けます。西畑さんは結婚はあきらめていましたが、ある時、お見合いの話が持ち上がりました。お相手に心惹かれ交際を望み、読み書きができないことを隠したまま結婚しました。秘密を抱えながら、何とか結婚生活を続けましたが、やがて妻に知られてしまいます。離婚を覚悟した西畑さんに、妻は救いの手を差し伸べます。文字を書く必要がある時には、妻が助けてくれました。お子さんにも恵まれ幸せな家庭を築くことができました。定年を迎えた西畑さんは64歳にして夜間中学への入学を決意します。長い間、ずっと自分を助け支えてくれた妻にラブレターを書くためでした。「何としても妻に感謝の気持ちを伝えたい」その一心で「あいうえお」から学び、7年かけてラブレターを書くことができたのです。
＜君のお陰で今の僕があります。君は僕を一人の人間として立ててくれて、うれしかったよ＞

センさんには「家族に自分の思いを遺したい」という願いが、西畑さんには「最愛の妻に感謝の気持ちを伝えたい」という願いがありました。二人にとって文字とは、自らの切なる思いを「自分の言葉」に託し、大切な誰かに届けるためのものだったのです。センさんの短い遺書にはセンさんの人生が全て詰まっているように思えます。だからこそ大きくて重みのある言葉として私たちの胸に迫ってくるのです。西畑さんのラブレターも同様です。

言葉を学ぶ、文字を学ぶということは、単に漢字を覚えたりきれいな文章を書いたりすることではありません。**「自分の心を自分の言葉にする力を身につけること」**であり、そして**「人の心を理解する力を身につけること」**なのです。**言葉は、人と人をつなぎます。文字は、時空を超えて人と人をつなぎます。**

今回は、センさんと西畑さんの文章から、そして、お二人の生き様から**「言葉を学ぶこと、文字を学ぶこと」の意味**について考えてみました。

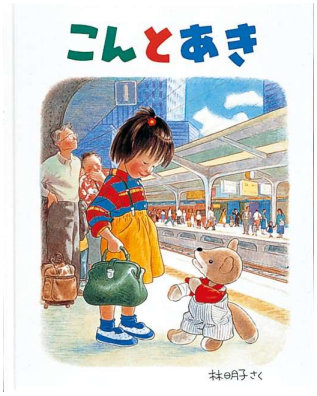


図書館からのおすすめ絵本



図書館オリジナルキャラクター
ブックろう

図書館では、家族が一緒に本を読むことで、読書に親しんでもらうとともに、
家庭内のコミュニケーションを深めることを目的とした「家読（うちどく）」（家庭読書）を推進しています。
こどもも大人も楽しめる、家読にぴったりの絵本をご紹介します♪



『こんとあき』
林　明子　作
福音館書店

『こんとあき』

こんな人におすすめ　思いやりと成長の物語をお探しの方へ

子どもの頃、母によく聞かせてもらっていた「こんとあき」。当時の私は、ぬいぐるみの「こん」に夢中で、大冒険の展開にドキドキ、ハラハラしました。

大人になり、母と当時の思い出話をしたときのこと、「私は、あきちゃんが頑張る姿に、胸が締め付けられるようだった」という母の言葉を聞き、視点の違いに驚きました。その言葉をきっかけに改めて読み返してみると、そこには全く違う景色がありました。いつも守られていると思っていた小さなあきちゃんが、健気に前を向いて進む姿に、今度は私自身の胸が深く打たれたのです。大人になると、また違う角度で心を満たしてくれるのは名作だからこそ。読んだ後、大切な人と感想を語り合いたくなる温かい一冊です。

※この本は、滑川町立図書館に所蔵があります（貸出中のときは予約ができます）

文化財シリーズ！第19回

「滑川町の歴史」part19



エコミュージアムセンター
オリジナルキャラクター

古墳時代（飛鳥時代）の滑川町　～仏教伝来と古代寺院の造営～

古墳時代後期（飛鳥時代）になると、倭（日本）に仏教が伝わり、多くの寺院が建立され飛鳥文化が花開きます。仏教は、百済の聖明王（せいめいおう）が欽明天皇（きんめいてんのう）に仏像や経典を送った6世紀中頃が公伝とされています。伝わった年には、538年説や552年説など諸説ありますが、現在は、538年説が有力視されています。公伝より以前にも、司馬達等（しばたっと）など渡来人等が仏像などを持ち込み信仰されていたと言われています。

仏教が伝わった当初は、政治的な対立も相まって崇仏派の蘇我氏と廃仏派の物部氏の間で争いがおこりますが、勝利した蘇我氏や聖徳太子（厩戸王（うまやどのおう））らによって、飛鳥寺や法隆寺などの塔や金堂などを含む伽藍を持つ寺院の建立が進み、692年には500を超える寺が存在していたとされます。



伽藍を持つ古代寺院（イメージ）



寺谷廃寺軒丸瓦
（県立歴史と民俗の博物館で展示中）

滑川町では、飛鳥寺の軒先に葺かれた軒丸瓦と似た文様の軒丸瓦が見つかり、周辺から大量の瓦が採集されることから、東日本最古の寺院とされる寺谷廃寺（羽尾）の存在が推定されています。寺谷廃寺には、以前に紹介した平谷窯跡群で生産された瓦が供給されていたと考えられていますが、現在までの調査では大量の瓦が出土していますが、寺院の建物跡等は見つかっていません。調査地点以外に寺があったのか、瓦をほかの場所に供給していたのかは断定できませんが、東日本でいち早く仏教に関係する技術などが伝来していたことが窺えます。

★寺谷廃寺の瓦の一部を、エコミュージアムセンターにて展示します！
展示期間：10/6（火）～10/31（土）　10:00～17:00
○10月の休館日：毎週月曜日及び10/11、10/13は、休館日のため休展です。